

幼児教育における身体表現活動の意味について

－小学校体育における表現運動領域との関連性から－

萩原 香織

A Study on the Meaning of Physical Expressive Activities in Early Childhood Education
－In Relation to the Expressive Movement area in Elementary School Physical Education－

Kaori Hagihara

新学習指導要領が告示され、学校体育における表現運動・ダンス領域が必修化になって6年ほどが経過した。未だその指導法や評価のあり方について課題が多いことが現状である。実際「踊る」、「表現する」という運動課題に対して、抵抗感のある学生も多い。その原因の一つには、それを表出するための運動素材としての、幼児期における身体表現活動にあるのではないかと考えた。

本研究では、幼児期の身体表現活動の内容と小学校体育における表現運動領域の関係を再確認し、幼児期に獲得しておくべき運動素材を再認識することを目的とした。その結果として、幼稚園教諭・保育士において、その系統性を意識しながら活動内容を計画することが必要不可欠であることが示唆された。

本研究において、ダンスが苦手な学生や表現することに抵抗のある学生に対してのアプローチとなる動感促発分析に向けての手がかりとなったのではないかと考える。

Key Words: 「身体表現活動」「表現運動」「踊る」「ダンス」「指導要領の系統性」

(Received October 24, 2023)

1. はじめに

筆者は現在、幼稚園教諭・保育士養成課程における身体表現活動に関する授業を担当している。幼稚園教育要項、幼保連携型認定こども園教育保育要項、保育所保育指針のいずれにおいても「表現」という項目の中には“音楽に合わせて身体を動かす”ことや、“自らのイメージを身体で表現する”という内容の表記が見られることから、幼稚園教諭、保育士を目指す学生にとっては必要不可欠な指導技術を獲得するためにも必須な授業であることが理解できる。

しかしながら、授業最初のオリエンテーションで行うアンケート結果からは、「楽しそう」「どんな内容なのかワクワクする」というポジティブな意見もある中、「ダンスは苦手だから正直やりたくない」、「リズム感がないのであまり好きではない」、「人前で表現することに抵抗が

* 鹿児島純心女子短期大学（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）非常勤講師

ある」など、ネガティブな意見も多い。その理由を聞いてみると、「小学校の体育の時間に表現した内容を馬鹿にされた経験がある」、「いきなり〇〇になれると言われても恥ずかしくてできなかった」「学校の先生にリズム感がないと指摘されたことがある」というような理由である。したがって授業開始は、「今から何をさせられるのだろうか・・・」、「また恥ずかしい思いをするのか・・・」というような不信感だらけの状況からスタートしているというのが現状である。彼女達の理由から推測するに、学校体育の中でのダンス領域におけるの苦い経験が身体表現にネガティブな印象を与え、さらにその後の人生における表現活動に大きく影響を与えていると考えられる。彼女達にこのような印象を与えてしまった原因は何であるのか、なぜそのような苦い経験となってしまったのかを考えてみると、小学校進学以前の幼児期におけるの身体表現活動のあり方に着目することが求められるのではないだろうか。この時期での活動内容が、小学校体育におけるダンス領域に影響を与えることになると推測される。ここに、幼稚園、認定こども園、保育園等における身体表現活動の意味を見出すことができる。

したがって本研究では、小学校体育におけるダンス領域との関わりから、幼児期の身体表現活動の重要性について考察するとともに、それを指導することになる学生達への意欲を高めるための一資料を得ることを目的とする。

2. 幼児期における身体表現

身体表現とは「人間の存在そのものの内的イメージを身体の動きによって外在化する行為」であり、「人間の存在そのものをかけて表現する芸術」だという。さらにこの身体を媒介とした表現行為である「身体表現」は「舞踊」あるいは「ダンス」と総称される文化・芸術領域につながっている⁽¹⁾。さらに「ダンス (dance)」の語源のひとつにdesire of lifeという意味があるように、「人々は、生きることにまつわる様々の思いや欲求を身体で語りかけ、生きる証として踊ってきた」という⁽²⁾。つまりわれわれ人間にとって、“踊る”ということは本能であり、その欲求を満たすものであると考える。例えば、自分とは異なる言語を話す相手とコミュニケーションを取ろうとすると、知らず知らずのうちにジェスチャーを大きくしていたという経験は少なからずあるだろう。また、言語能力が未発達の幼児は、楽しかったことや驚いたことを伝えたいという思いで、一生懸命体を動かし、われわれに語りかけようとしてくれる。これらは“相手に伝えたい”という欲求を満たそうとしたための行為であり、ノンバーバルコミュニケーションとしてのダンスの初期段階であるといえる。

また聞こえてくる音楽、リズムに合わせて身体を動かすということも本能的な欲求である。例えば好きなアーティストのライブに行き、リズムに乗ってジャンプをしたり、歌に合わせて手や身体を大きくゆらしながら陶醉するということもあるだろう。また誰もが幼い頃、人目も気にせずテレビから流れてくる曲に合わせて、無我夢中でまさに「即興的」に踊ったという経験があるはずである。これらは音楽のリズムに体が反応し、聞こえてくる音楽のリズムと自らの動きのリズムを共調させ、“リズムに乗っている”という状況を身体が感じているのである⁽³⁾。リズムに乗って身体を動かすということは、心身を解放し、「楽しい」という快情動と共に多様な動きの経験が蓄積されており、これが基本的な創造的身体表現の土台になると考えられて

いる⁽⁴⁾。

このようにみると、自らの身体を使って表現活動をするということは、幼児期のこども達にとってはごく当たり前の欲求であり、“遊びながら”表現することに喜びを感じているといえる。ここで“遊び”についてカイヨワは「アゴン（競争）」、「アレア（運）」、「ミミクリ（模倣）」、「イリンクルス（めまい）」の4種に大別し、さらに「パイディア」と「ルドウス」という一対の概念を導入している。「パイディア」とは気晴らし、騒ぎ、即興、無邪気な発散という概念であり、そこには統制されていない気紛れといったものが感じられるという。この反対の極としての「ルドウス」は、困難な状態（熟達の方角）に喜びを感じるもので、一そうの努力、忍耐、器用がなければこの目標に到達はできないという方向性を持っていると定義したうえで、「すべての遊びを二つの相反する極の間に配置することができる」と述べている⁽⁵⁾。これを身体表現における分類にしてまとめたものが図1である。

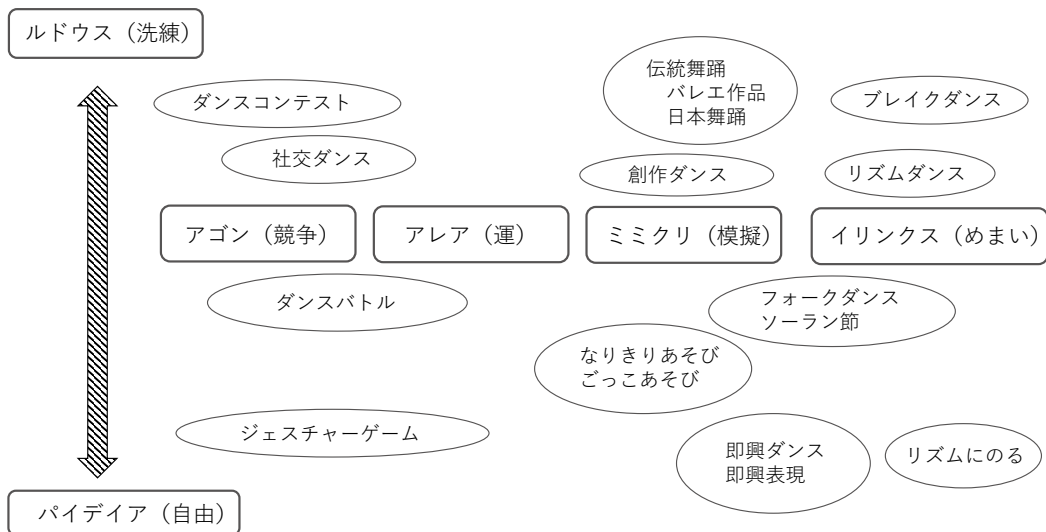


図1 プレイ論からみる身体表現・ダンスの位置付け

まさにダンスはこのカイヨワが述べているプレイ論の全てを網羅することができる。いうまでもなく、こども達にとっては“身体表現活動そのものが遊び”であるといえよう。したがって保育活動のなかでの「身体表現活動」は「遊び」のなかで存在するべきものであり、そこに否定的な指摘や指導は全く意味をなさないということも重要な観点であると考えられる。指導者側において活動内容にあたっての課題や目標を設定していたとしても、こども達にとっては「遊び」のなかで勝手に身についたという認識のもとに身体知として経験させることが重要である。幼稚園教育要領において「幼児の自己表現は素朴な形で行われることが多いので、教師はそのような表現を受容し、幼児自身の表しようとする意欲を受け止めて、幼児が生活のなかで園児らしい様々な表現を楽しむことができるようにすること。」⁽⁶⁾という記載があることからこの点に関しては重要視されているといえる。

以上のことから幼児期という貴重な時期に、より多くの多彩な身体表現活動を楽しみながら経

験することが、その後の身体表現活動さらには学校体育における表現活動での活動に大きな影響を及ぼすということがいえるのではないだろうか。

3. 小学校学習指導要領にみる表現運動の内容と幼児教育における身体表現の関連性

(1) 小学校学習指導要領における表現運動の内容

これまで、幼児期の身体表現活動の必要性を述べてきた。では、この時期の身体表現活動がその後の小学校体育の表現運動のなかでどのように関連付いていくのかを考察していきたい。

そのために、小学校体育における表現運動の取り扱いについて触れておきたい。平成29年に告示された小学校学習指導要領解説では、表現運動の「知識及び技能」の内容として表1のように示されている。

表1 小学校学習指導要領による表現運動のねらい（知識及び技能）

学年	分野	ねらい
低学年	表現あそび	身近な題材の特徴を捉え、そのものになりきって全身で即興的に踊ること。
	リズム遊び	軽快なリズムの音楽に乗って弾んで踊ったり、友達と調子を合わせたりして即興的に踊ること。
	フォークダンス	(簡単なフォークダンスを軽快なリズムに乗って踊る内容含めて指導可)
中学年	表現	身近な生活などの題材から主な特徴や感じを捉え、表したい感じをひと流れの動きで即興的に踊ること。
	リズムダンス	軽快なロックやサンバなどのリズムの特徴を捉え、リズムに乗って弾んで踊ったり、友達と関わり合ったりして即興的に踊ること。
	フォークダンス	(加えて指導可)
高学年	表現	いろいろな題材からそれらの主な特徴を捉え、表したい感じやイメージをひと流れの動きで即興的に表現したり、グループで簡単なひとまとまりの動きにして表現したりすること。
	リズム遊び	(加えて指導可)
	フォークダンス	日本の民謡や外国の踊りの踊り方の特徴を捉え、基本的なステップや動きを身につけて、音楽に合わせてみんなで楽しく踊って交流すること。

表1の通り、小学校体育における表現運動領域は主に「表現系」、「リズム系」、「フォークダンス」の3つの分野に分類されている。「表現系」、「リズム系」においては、低学年では「表現遊び」、「リズム遊び」、中学年・高学年では「表現」及び「リズムダンス」と表記の差に違いがある。また「表現系」はどの学年においても指導されるが、「リズム系」と「フォークダンス」においては、学習する時期に違いがある。しかしながら、小学校6年間ですべての分野を学習することになっていることがわかる。

その内容を詳しく見てみると表2のようにになっている。

新しいものを学習するというよりはむしろ、これまで学習してきた内容をさらに発展させて

表2 小学校及び中学校の領域別系統表（表現運動系）

		低学年	中学年	高学年	中学校
表現系	題材の例	・特徴が捉えやすく多様な感じを多く含む教材 ・特徴が捉えやすく速さに変化のある動きを多く含む教材	・身近な生活からの題材 ・空想の世界からの題材	・激しい感じの題材群（集団）生きる題材 ・多様な題材	・身近な生活や日常動作 ・対極の動きの連続 ・多様な感じ ・群（集団）の動き ・もの（小道具）を使う
	ひと流れでの動きで即興的に表現	・いろいろな題材の特徴や様子を捉え、高低の差や速さの変化のある全身の動きで即興的に踊る ・どこかに「大変だ！○○だ！」などの急変する場面を入れて簡単な話にして続けて踊る	・題材の主な特徴を捉え、動きに差を付けて好調したり、表したい感じを二人組で対応する動きや対立する動きで変化を付けたりして、メリハリ（緩急・強弱）のあるひと流れの動きで即興的に踊る	・題材の特徴を捉えて、表したい感じやイメージを、動きに変化を付けたりして、メリハリ（緩急・強弱）のあるひと流れの動きにすて即興的に踊る	・多様なテーマからイメージを即興的に表現する ・イメージを即興的に表現する ・変化を付けたひと流れの動きで表現する ・動きを誇張したり繰り返ししたりして表現する
	簡単なひとまとまりの動きで表現	（表記なし）	（表記なし）	・表したい感じやイメージを「はじめ-なか-おわり」の構成や群の動きを工夫して簡単なひとまとまりの動きで表現する	・変化と起伏のある「はじめ-なか-おわり」のひとまとまりの動きで表現する
	発表の様子	・続けて踊る	・感じを込めて踊る	・感じを込めて通して踊る	・動きを見せ合って発表する
リズム系	リズムの例	・弾んで踊れるようなロックやサンバなどの軽快なリズム	・軽快なテンポやビートの強いロックのリズム ・陽気で小刻みなビートのサンバのリズム	（加えて指導可）	・シンプルなビートのロックのリズム ・一拍ごとにアクセントのあるヒップホップのリズム
	リズムに乗って全身で踊る	・へそ（体幹部）を中心に軽快なリズムの音楽に乗って即興的に踊る ・友達と関わって踊る	・ロックやサンバなどのリズムの特徴を捉えて踊る ・へそ（体幹部）を中心にリズムに乗って全身で即興的に踊る ・動きに変化を付けて踊る ・友達と関わり合って踊る		・ロックやヒップホップなどのリズムの特徴を捉えて踊る ・リズムに乗って全身で自由に弾んで踊る ・簡単な繰り返しのリズムで踊る
	発表や交流	・友達と一緒に踊る	・踊りで交流する		・動きを見せ合って交流する
フォークダンス	踊りと特徴	（含めて指導可） ・軽快なリズムと易しいステップの繰り返しで構成される簡単なフォークダンス	（加えて指導可）	・日本の民踊：軽快なリズムの踊り、力強い踊る ・外国のフォークダンス：シングルサークルで踊る力強い踊り、パートナーチェンジのある軽快な踊り、特徴的な体型と構成の踊り	・日本の民踊：小道具を操作する踊り、童謡の踊り、躍動的な動作が多い踊り ・外国のフォークダンス：パートナーチェンジのある踊り、隊形が変化する踊り、隊形を組む踊り
	発表や交流	・友達と一緒に踊る		・踊りで交流する	・仲間と楽しく踊って交流する

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説より抜粋

いくという学習の進めかたになっていることがわかる。さらには小学校における表現運動の学習内容が中学校におけるダンス領域へと発展していることもわかる。したがって、指導者はこの系統性を十分に理解して指導計画を作成する必要がある。

(2) 幼児期における身体表現活動の内容

次に、幼児期における表現の領域において体を使った身体表現活動に着目してみていきたい。幼稚園教育要領（平成29年告示）の表現の内容には「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造力を豊かにする」ことが到達目標として掲げられている。その内容として身体表現に着目してみると、「感じたこと、考えたりしたことを音や動きで表現したり、自由に書いたりつくったりなどする」、「自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう」と記されている⁽⁷⁾。このことに関しては、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（満3歳児以上の園児の教育及び保育に関するねらい及び内容）⁽⁸⁾、さらには保育所保育指針（満3歳児以上の園児の教育及び保育に関するねらい及び内容）⁽⁹⁾においても同じ内容が記されている。さらに幼保連携型認定こども園教育・保育要領⁽¹⁰⁾、保育所保育指針⁽¹¹⁾において、1歳以上3歳未満の園児においても「感じたことや考えたことなどを自分なりに表現しようとする」ことが“ねらい”として挙げられ、その内容として「音楽、リズムやそれに合わせた体の動きを楽しむ」、という記載が見られる。このことから、系統性を持ったつながりのある内容とすることが望まれており、いかなる時期においても“体を使って表現することを楽しむ活動”に積極的に取り組むことが重要視されているといえよう。

(3) 授業内で取り扱う内容と指導要領との関連性

冒頭で述べた通り、筆者は幼稚園教諭・保育士養成課程に関する授業「保育内容（表現）の指導法Ⅱ（リズムあそび）」を担当している。その授業の中で取り扱う内容を以下の表3にまと

表3 授業内で取り扱う課題とその内容

	課題	内容
	～リズムにあわせて～	
1	し・し・忍び足	忍者になって敵に見つからないよう、へんしんの術！
2	カエルの体操	カエルがさまざまな様子に変化しながらストレッチ
3	へんしん	リズムに乗って、いろいろなものにへんしん！
4	ぼよん行進曲	元気よく行進しながら踊ろう（円になって）
5	リンゴゴリンゴ	ゴリラの気分で弾みながら全身で踊ろう
6	ドレミの歌	ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ドそれぞれの動きで踊ろう
7	手のひらを太陽に	歌詞をイメージしながら歌に合わせた動きで踊ろう
8	マスカット	軽快なリズムに乗ってノリノリで踊ろう
	～絵本をつかって～	
9	だるまさんが	「だるまさんが〇〇！」絵を見て、だるまさんのまねをしよう
10	だるまさんの	「だるまさんの〇〇！」体のパーツを強調して表現しよう
11	だるまさんと	「だるまさんと〇〇！」友達と一緒に色々なポーズをまねしよう
12	もこ もこ もこ	幾何学模様の絵とオノマトベからイメージして表現してみよう
13	もりのおふろ	もりの中にある“おふろ”に様々な動物が入ってくる物語を再現してみよう
	～ものをつかって～	
14	新聞紙をつかって	新聞紙のまねをして遊んだり、新聞紙を何かに見立てて表現してみよう
15	フラフープをつかって	フラフープの特性を生かした遊びをしたり、フラフープを使ってリズムに乗って踊ろう

表4 授業での課題と表現運動領域の関係性

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
		し・し・忍び足	カエルの体操	へんしん	ぼよん行進曲	リンゴゴリンゴ	ドレミの歌	手のひらを太陽に	マスカット	だるまさんが	だるまさんの	だるまさんと	もこもこもこ	もりのおふろ	新聞紙をつかって	フラフラを
低学年	表現遊び	○	○	○		○				○	○	○	○	○	○	
	リズム遊び		○	○	○	○	○		○							○
	フォークダンス				○											○
中学年	表現							○					○	○	○	
	リズムダンス					○			○							○
	フォークダンス	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
高学年	表現							○					○	○	○	
	リズムダンス	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	フォークダンス															

めた。授業においては幼児期の表現活動から、小学校表現運動領域さらには中学校ダンス領域にまで発展していくことを視野に内容を計画している。

これを、先ほど提示した表1に当てはめていくと、以下の表4のようになる。

このように、主に小学校低学年での表現運動領域のねらいに準じた内容を、幼稚園教諭・保育士養成課程に関する授業の課題として取り扱っている。学生においては、なぜこのような内容を学ぶ必要があるのか、なぜ幼児期の身体表現活動の内容としてこのような課題が大切であるのかを理解してもらい、自らの表現活動の身体知形成に向きあい、積極的に取り組んでほしいと思う。

4. おわりに

金子は、人間の動きについて考察するとき、機械的な動きのそれとは厳密に区別しなければならないとした上で、現象学を規定に据えた現象学的運動学からの視点が重要であることを説いている。「身体知の発生様態を人間学的に分析するために、意味や価値の関連系を包含した機能概念、つまり、自己運動、主体性、身体性という三つの基本的な運動認識が起点に据えられているのでなければならない」と述べており、これらが達成されてはじめて、「状況に生きる有意味な身体運動は現象学的形相論として厳密な形態学的分析の対象に取り上げられる資格をもつことができる」ことを強調している⁽¹²⁾。ここで示す身体知とは、今ここに息づいて動きつつ感じ、感じつつ動ける身体が意味されている生命的身体の持つ「運動能力」のことである⁽¹³⁾。われわれが運動・スポーツを行おうとするとき、この「身体知」という運動能力を発揮して動きを生み出しており、それを支える“わたしの動きの感覚”である「動感（キネステーズ）」⁽¹⁴⁾を頼りに運動図式を形成する。そのためには動きを生み出すための動感素材を一つに統合し、

調和化された「動感メロディー」を生成しなくてはならない¹⁵⁾。

“踊る”，“ダンスする”，“表現する”，“リズムに乗る”このような動きを生み出すための動感メロディーを生成するには，幼児期の身体表現活動の中で経験した“なりきる”，“リズムを感じて跳ねる”，“イメージを体であらわす”といった動感素材が根底に息づいている必要がある。冒頭で述べた“ダンスが苦手”な学生達は，これらの素材がうまく身体知として獲得されないまま，学校体育の表現運動に出会い，戸惑ってしまったこともその理由の一つなのではないかと感じてしまう。もしくは素材としては得ていたとしても，それをうまく統覚化できずに動感メロディーを生成することが難しく感じてしまったのかもしれない。

幼児期の遊びを通しての身体表現活動というのは，その後の学校体育における表現運動領域における動感素材を獲得する重要な活動であるといえる。幼児期から小学校，さらには中学校・高等学校までつながる身体表現活動の系統性の，まさに根底に息づく大切な時期である。このことを幼稚園教諭・保育士を目指す学生には存分に理解してもらう必要があり，学生自らの身体表現活動の充実も含めて実りある授業を提供したいと心から思う。

本研究においては，ダンスが苦手な学生や，表現することに抵抗のある学生の苦手意識の原因についてアプローチするとともに，幼児期における身体表現活動の重要性を提示しただけにすぎない。今後は“踊る”，“表現する”ための身体知獲得に向けた動感促発分析を手がかりに，幼児期の身体表現活動においていかなる動感素材を身に付けさせておくべきかということに着目して研究を進めていきたい。

引用文献

- (1) 高野牧子〔編者〕(2015)：うきうきわくわく身体表現あそび－豊かに広げよう！子どもの表現世界－，同文書院，p. 2.
- (2) 舞踊教育研究会(1991)：舞踊学講義，大修館書店，p. 3.
- (3) 宮本香織(2011)：「ダンスにおける『リズムにのる』ことについての一考察」，スポーツ運動学研究24，pp. 65-73.
- (4) 高野牧子〔編者〕(2015)：前掲載書，p. 28.
- (5) ロジェ・カイヨワ〔多田道太郎・塚崎幹夫 訳〕(1990)：「遊びと人間」，講談社学術文庫，pp. 42-45.
- (6) 文部科学省(2017)：幼稚園教育要領（平成29年告示），p. 21.
- (7) 文部科学省(2017)：前掲載書，pp. 20-21.
- (8) 文部科学省・厚生労働省(2017)：幼保連携型認定こども園教育・保育要領（平成29年告示），pp. 24-25.
- (9) 厚生労働省(2017)：保育所保育指針（平成29年告示），p. 29.
- (10) 文部科学省・厚生労働省(2017)：前掲載書，p. 24.
- (11) 厚生労働省(2017)：前掲載書，p. 21.
- (12) 金子明友(2009)：「スポーツ運動学」，明和出版，p. 178.
- (13) 金子明友(2005)：「身体知の形成（上）」，明和出版，p. 2.

- (14) 金子明友 (2005) : 前掲載書, pp. 304-305.
- (15) 金子明友 (2005) : 「身体知の形成 (下)」, 明和出版, p. 42.
- (16) 金子明友 (2009) : 前掲載書, pp. 309-313.

